

「秃髮樹機能の乱」再考★

はじめに

泰始六(270)年六月から咸寧五(279)年十二月の間、西晋を悩ませたものの一つが樹機能の起こした戦役である。これは主として秦州・涼州の胡族¹を中心に展開したものであり、西晋朝廷にとって大きな政治的軍事的課題であった。同時期の西北地域のできごとを年表形式にまとめたものが、以下である。

年	月	できごと
泰始五年 (269)	五月	秦州が新たに設置される。
泰始六年 (270)	六月	秦州刺史の胡烈が叛虜(=樹機能)を萬斛堆に討つも敗死する。
泰始七年 (271)	四月	北地胡が金城を攻め、涼州刺史の牽弘が対応するも戦死。
	七月	賈充出鎮の詔が出される。(結果的に賈充は出鎮せず)
泰始十年 (274)	八月	涼州虜が金城の諸郡を攻める。鎮西将軍等の司馬駿が対応し乞文泥を斬る。
咸寧元年 (275)	二月	叛虜の樹機能が西晋に人質を送って降る。
咸寧二年 (276)	五月	司馬駿が北胡を討つ。
	七月	西域戊己校尉の馬循が鮮卑の阿羅多を討ち、降らせる。
咸寧三年 (277)	三月	文俶が樹機能を破る。樹機能を筆頭に、安定・北地・金城の諸胡など二十万以上が降る。
		この年、西北の雑虜・鮮卑・匈奴等が西晋に降る。

*学会報告用レジュメのため、著者に断りなく引用・転載する事を禁ずる。

¹ 本報告では、便宜的に非漢族の総称として胡族の語を用いる。

咸寧四年 (278)	六月	涼州刺史の楊欣が虜の若羅拔能と武威で戦い、敗死。『資治通鑑』は若羅拔能を樹機能の党とする。
咸寧五年 (279)	正月	樹機能が涼州を陥落させる。馬隆が武威太守等として派遣される。
	十二月	馬隆が樹機能を斬る。

※『晋書』・『資治通鑑』等に基づき作成。

さて、この一連の戦役は一般に「秃髮樹機能の乱」と言われる。これは、首謀者である樹機能が鮮卑の秃髮氏であったと見做されるためである。しかし、『晋書』を見てみると、「秃髮樹機能」という記述は存在せず、あくまで秃髮氏の系譜に樹機能が位置づけられているに過ぎない。では、果たして樹機能は本当に秃髮氏なのであろうか。

本報告では、この疑問点から出発し、まず第一章で鮮卑秃髮氏の系譜に検討を加え、樹機能への接続が作為的に行われたものである点を確認し、彼がおそらく羌である事を論じる。旧来の研究は、樹機能を鮮卑とする事が自明であったため、第一章の結論は樹機能の挙兵について再検討を要請するものとなる。

そこで第二章では、樹機能平定に最初に動いた胡烈が秦州刺史であった事を手掛かりに、西晋における秦州と胡族の関係を整理する。ここでは樹機能が鮮卑ではない事が改めて確認され、秦州の抱える二つの地域の胡族問題が浮き彫りとなる。それを受けて第三章では、西晋の地方官と胡族の関係から、その問題点を考察し、何故、樹機能が西晋と戦わねばならなかったのかを考察する。

では、まず樹機能は本当に鮮卑秃髮氏なのかという問題を、秃髮氏の系譜を手掛かりとして見ていこう。

一、樹機能の出自に関する検討—禿髮氏の系譜と樹機能—

本章では、禿髮氏の系譜史料の再検討を通して、樹機能が鮮卑禿髮氏であるのか否かが考察される。

▶樹機能＝鮮卑禿髮氏とする史料

『晋書』卷一二六、禿髮烏孤載記²

禿髮烏孤、河西鮮卑人也。……（八世祖）匹孤卒、子壽闡立。……壽闡卒、孫樹機能立、壯果多謀略。……後爲馬隆所敗、部下殺之以降。從弟務丸立。

死、孫推斤立。死、子思復鞬立、部衆稍盛。烏孤即思復鞬之子也。

禿髮烏孤、河西鮮卑の人なり。……（八世祖の）匹孤、卒し、子の壽闡、立つ。……壽闡、卒し、孫の樹機能、立ち、壯果にして謀略多し。……後、馬

隆の敗る所と爲り、部下、之（発表者注：樹機能を指す）を殺して以て降る。

從弟の務丸、立つ。死して、孫の推斤、立つ。死して、子の思復鞬、立ち、部衆、稍と盛ん。烏孤、即ち思復鞬の子なり。

→この系譜は果たして妥当なのか

一-1、禿髮推斤と樹機能

『資治通鑑』卷一〇一、興寧三（365）年十月条

鮮卑禿髮推斤³卒、年一百一十、子思復鞬代統其衆。推斤、樹機能從弟務丸之孫也。

² 『太平御覽』卷一二六、偏霸部一〇所引『十六国春秋』南涼録もほぼ同文を載せる。

³ 『資治通鑑』はその名を禿髮推斤とするが、『晋書』は禿髮推斤とする。恐らくどちらかが書き間違えたのであろう。本報告では、『太平御覽』卷一二六、偏霸部所引『十六国春秋』南涼録に従って、「推斤」を是とする。

鮮卑の秃髮推斤、卒す、年は一百一十、子の思復鞬、代りて其の衆を統ぶ。

推斤、樹機能の従弟の務丸の孫なり。

⇔一見して推斤の卒年は極めて疑わしい

→しかも仮にこれを信じるとすると、秃髮推斤の生年は二五六年になるが…

⇔樹機能の敗死は二七九年

→樹機能の従弟の孫が二五六年生まれ？

⇒推斤の卒年を一〇〇歳としつつ樹機能に接続するこの系譜は矛盾を含む

→これは単なる伝承以上のものとは見做し難い。

【秃髮氏世系図（附拓跋氏世系図）】

		河西へ？	秃髮を名乗る？	↓作為 樹機能 (?-279)					涼州へ？	
詰汾	匹孤	壽闐	○					烏孤 (?-399)	○	承鉢
			○	務丸	○	推斤 (256? - 365)	思復鞬 (?-386-?)	利鹿孤 (?-402)	○	副周
								偃檀 (365-415)	保周 破羌 (=源賀) (407-479)	
	力微 (?-277)	沙漠汗	猗屯 (?-305)	賀偃 紇那					俱延	覆龍
			猗盧 (?-316)							
			弗	鬱律 (?-321)	翳槐 什翼犍 (318-376)	獻明帝 (?-371)	道武帝 (371-409)	明元帝 (392-423)	太武帝 (408-452)	
				悉鹿 (?-286)						
				綽 (?-293)						
				樓官 (?-307)						

↑秃髮氏への接続は作為

※『晋書』『魏書』『資治通鑑』などに基づいて作成

一-2、拓跋氏との比較

→源賀 (=秃髮破羌) と太武帝の両名は同世代

→そこから遡ると、樹機能は拓跋鬱律らと同世代の人となるはず

⇔樹機能は拓跋部で言えば、拓跋力微と活動時期を近くする⁴

※無論、二つの家系が長期間にわたって同じように代を経る事は難しい

→実際の活動時期が樹機能と重なる拓跋力微は拓跋鬱律の曾祖父

→ここまで世代がずれるだろうか？

◎推斤の死亡時に示される系譜においても、源賀から遡って拓跋氏と世系を比較しても、樹機能の位置づけは極めて疑わしい。故に、禿髮氏の世系がその先祖に樹機能を設定する事は仮託であると結論すべき。

一-3、樹機能は何なのか

樹機能を鮮卑であると断言する史料は、上に否定した禿髮氏の系譜が主

→では『晋書』のそれ以外の個所では如何様に記されているのか？

『晋書』卷五九、汝南王亮伝：「會秦州刺史胡烈爲羌虜所害」

『晋書』卷三八、扶風王駿伝：「羌虜樹機能」

→西晋が樹機能らを羌として記す事例が散見

+ 樹機能平定に起用された杜預に東羌校尉が与えられている⁵

+ 樹機能平定に賈充が投入される時、「氏羌反叛」が問題となる⁶

⁴ 『晋書』卷三、武帝紀、咸寧三（277）年条

春正月……使征北大將軍衛瓘討鮮卑力微。……三月、平虜護軍文淑討叛虜樹機能等、並破之。

⁵ 『晋書』卷三四、杜預伝

司隸校尉石鑿以宿憾奏預、免職。時虜寇隴右、以預爲安西軍司、給兵三百人、騎百匹。到長安、更除秦州刺史、領東羌校尉・輕車將軍・假節。

⁶ 『晋書』卷四〇、賈充伝

及氏羌反叛、時帝深以爲慮、愷因進説、請充鎮關中。乃下詔曰「秦涼二境、比年屢敗、胡虜縱暴、百姓荼毒。遂使異類扇動、害及中州。……」

+ 樹機能の一派に敗死させられる楊欣の問題点に「失羌戎之和」が指摘⁷
⇒樹機能は羌と見做されるグループ⁸の一人であったと見て良い⁹

◎これまでの研究が自明視していた樹機能＝鮮卑秃髮氏説は成立しない。従って、「羌の樹機能」が起こした戦役を如何に捉えるのかは再度検討されなくてはならない。次章では、その問題を樹機能が挙兵した秦州を中心に考える。

⁷ 『晋書』卷五七、馬隆伝

初、涼州刺史楊欣失羌戎之和、隆陳其必敗。俄而欣爲虜所沒、河西斷絶、帝每有西顧之憂。

楊欣の敗死は、『資治通鑑』卷八〇、咸寧四（278）年六月条に、

（楊）欣與樹機能之黨若羅拔能等戰于武威、敗死。

とあるを参照。

⁸ つまり、本人が羌族だったか否かが問題なのではなく、西晋から羌として管理される乃至認識されるグループだという事である。何故、斯く回りくどい表現をするかと言えば、既に王明珂氏が指摘している如く、「漢魏晋時期の氏・羌・夷は全て当時の華夏の人が異族に対して用いた呼称であって、特定の種族の自称ではない」（王明珂『華夏辺縁 歴史記憶与族群認同【増訂版】』浙江人民出版社、二〇一三年、二一〇頁、初版一九九七年、拙訳）からである。王氏は「羌とは中国西北に代々存在していた特定の『民族』ではなく、代々の華夏の人にあった西方の異族に対する『概念』である」（同書、一九四頁、拙訳）と概括する。また、同一の認識は酒井駿多氏も示している。酒井氏は、「史料上に残る『羌』は実際に連続性を持って存在していた集団などではなく、ましてや現代で言うところの『民族』とはまったく違う。『羌』は漢人の意識の中にのみ存在した『概念』に過ぎない」と言う（酒井駿多「漢代の「羌」という虚像—白馬と東羌を例に」『上智史学』六二、二〇一七年、七三頁）。何れにせよ、羌を特定の種族集団と結びつける事よりも、広く中国西北部に展開していた胡族集団の一つと理解する方が穏当であろう。そして、樹機能も斯様な羌の一人だと思われる。従って、本報告で羌と呼んでおくものの、それは特定の種族を指すものではない。

⁹ 特に論拠は示されていないものの、安田二郎氏は樹機能の事を「羌族樹機能」と記す（安田二郎「西晋朝初期政治史試論」同『六朝政治史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇三年、三二頁、初出一九九五年）。恐らく安田氏は『晋書』の記述に基づいて樹機能を羌と見做していたと思しいが、本報告の主題からすると、この点は極めて示唆的だろう。卒爾に『晋書』を読むと、樹機能は羌と解さざるを得ないのである。

二、西晋の秦州における胡族問題—秦州西部と東部の差—

本章では、樹機能の挙兵した秦州の抱える問題を検討し、それが樹機能と如何に関わっているのかが示される。

▶樹機能の挙兵地＝萬斛堆

『晋書』卷一二六、禿髮烏孤載記¹⁰

壽闡卒、孫樹機能立、壯果多謀略。泰始中、殺秦州刺史胡烈於萬斛堆、敗涼州刺史蘇愉于金山、盡有涼州之地。

壽闡、卒し、孫の樹機能、立ち、壯果にして謀略多し。泰始中、秦州刺史の胡烈を萬斛堆に殺し、涼州刺史の蘇愉を金山に敗り、盡く涼州の地を有す。

▶萬斛堆の位置比定：今日なお一定していない

- ①楊守敬『西晋地理図』：寧夏回族自治区固原市付近及び甘肅省靖遠県の二点
- ②周偉洲氏：「甘肅省祖歷河支流北河河口」¹¹（靖遠周辺か）
- ③關尾史郎氏：「甘肅鎮原県付近」¹²

→何れにせよ、地理比定の考証過程が示されず

¹⁰ 本報告では既に述べた如く、鮮卑禿髮氏の世系に樹機能が接続された事は仮託であって事実ではないと見做している。しかしながら、仮託している以上、禿髮氏に関する記述の中の樹機能の部分において、樹機能の行状そのものは一定程度の信頼が置けると考えている。なんとなれば、樹機能への仮託に真実味を持たせるのであれば、その行状はなるべく正確である方が有利だからである。ために報告者は、『晋書』禿髮烏孤載記の樹機能の描写については信を置く。なお、紙幅の都合もあって、何故、禿髮氏が樹機能を先祖として仮託したのかという点は検討し得なかった。この点は今後の課題としたい。

¹¹ 周偉洲『南涼与西秦』（広西師範大学出版社、二〇〇六年、初版一九八七年）、一三頁。なお、同書は二〇二一年八月に社会科学出版社から新版が出ているが、遺憾ながら本発表までに実見する事が出来なかった。

¹² 前掲關尾史郎「南涼政權（三九七-四一四）と徙民政策」、四九頁。



④譚其驥氏：左図¹³

→これも考証過程が示されていないが『晋書』
卷一三〇、赫連勃勃載記¹⁴を踏まえての比定
だと推察される

⇒本報告では万斛堆の位置は譚其驥説に従う
＝西晋の秦州西部

→金城郡は樹機能挙兵の当時、秦州に属する

※秦州の管轄範囲：金城・隴西・南安・天水・
略陽・武都・陰平¹⁵

二-1、秦州設置と胡族問題

西晋の秦州は、樹機能挙兵の前年に新設

→『資治通鑑』卷七九、泰始五（269）年二月条によると、鮮卑問題と関わって
の設置とされる

分雍涼梁州置秦州、以胡烈爲刺史。先是、鄧艾納鮮卑降者數萬、置於雍涼之

¹³ 譚其驥主編『中国歴史地図集』四（地図出版社、一九八二年、一五～一六頁）を基
に加筆・補整。

¹⁴ 勃勃初僭號、求婚于秃髮儁檀、儁檀弗許。勃勃怒、率騎二萬伐之、自楊非至于支陽
三百餘里、殺傷萬餘人、驅掠二萬七千口・牛馬羊數十萬而還。儁檀率衆追之、其將焦
朗謂儁檀曰「勃勃天姿雄鷲、御軍齊肅、未可輕也。今因抄掠之資、率思歸之士、人自
爲戰、難與爭鋒。不如從溫圍北渡、趣萬斛堆、阻水結營、制其咽喉。百戰百勝之術
也。」

なお、「支陽」については『晋書勅注』の同個所が「案支陽即枝陽。」と注している
のに従う。

¹⁵ 『晋書』卷一四、地理志上、秦州条参照。

間、與民雜居。朝廷恐其久而爲患、以烈素著名於西方、故使鎮撫之。

雍・涼・梁州を分けて秦州を置き、胡烈を以て刺史と爲す。是れより先、鄧艾、鮮卑の降る者數萬を納れ、雍涼の間に置き、民と雜居せしむ。朝廷、其の久しくして患と爲るを恐れ、烈の素より西方に著名なるを以て、故に之を鎮撫せしむ。

+ 羌族対策の面も有す¹⁶

→秦州には大きく羌問題と鮮卑問題があった

→二つの問題を抱える具体的な地域は何処か

二-2、秦州西部と樹機能

秦州の管轄下にある武都や陰平（＝秦州西部）には、後漢末以来、多くの氏・羌が居住¹⁷

▶樹機能らの主戦場

『晋書』卷四四、石鑒伝

時秦涼爲虜所敗、遣鑒都督隴右諸軍事、坐論功虚偽免官。

時に秦・涼、虜の敗る所と爲り、鑒を遣わして隴右の諸軍の事を都督せしむ

¹⁶ 丁樹芳「從“撫納氏羌”到控制秦州—東羌校尉与魏晋隴右政局」（『青海民族研究』二六卷第二期、二〇一五年）参照。

¹⁷ 馬長寿『氏与羌』（広西師範大学出版社、二〇〇六年、初版一九八四年）、前掲王明珂『華夏辺縁 歴史記憶与族群認同【増訂版】』等参照。また、陳勇「董卓進京述論」（『中国史研究』一九九五年第四期）は、後漢代の涼州は「羌胡化」していたと指摘する。そして、満田剛「蜀漢・諸葛亮の北伐戦略と隴西・河西回廊の非漢族について—後漢・三国期の羌・涼州諸國王」（『東洋哲学研究所紀要』三三、二〇一七年）は、後漢末から曹魏初期における隴西・河西回廊の胡族が（中国王朝に対して）不安定な動きをしていた事を指摘する。西晋代ではその「不安定の前線」とでも呼ぶべき羌らの分布が、更に東に進んでいたと見る事ができよう。

るも、論功虚偽に坐して免官さる。

+前掲注6『晋書』賈充伝「秦涼二境」

+前掲注7『資治通鑑』卷八〇、咸寧四(278)年六月条「武威」

+咸寧五(279)年正月に樹機能が涼州(武威)を陥落させる

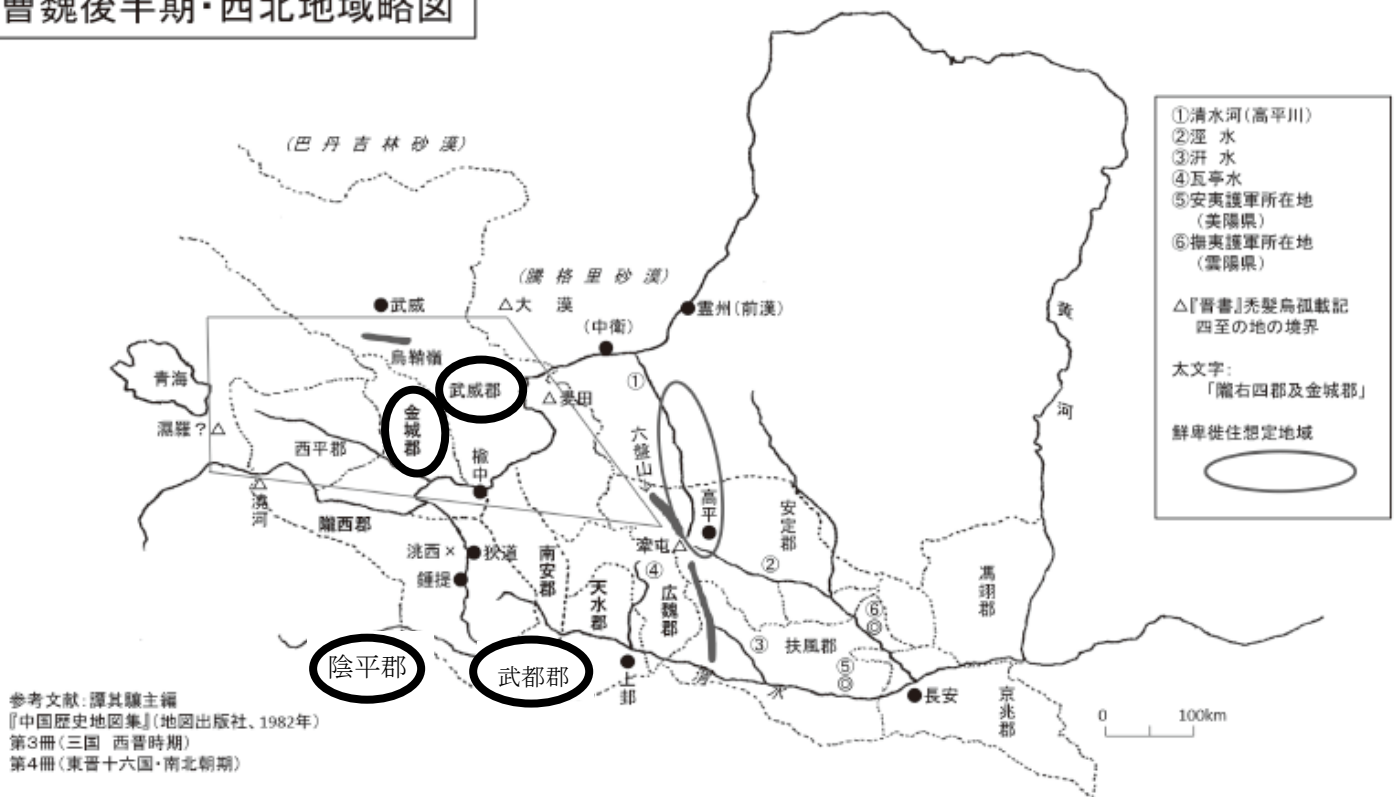
→樹機能の主戦場は秦州から涼州にかけて

⇒挙兵の地が秦州西部であった点に鑑みれば、この秦州西部から涼州が樹機能の勢力範囲であったと見て良い

=羌問題の場

←樹機能を羌と見做す本報告から見れば、氐・羌の主たる居住範囲と樹機能一党の主たる活動範囲とが秦州西部で重なるのはむしろ当たり前

曹魏後半期・西北地域略図



(野中敬「鄧艾の鮮卑徙住をめぐる」五七頁所携の地図を基に加筆・補整)

二-3、秦州東部と鮮卑

当時、鮮卑の問題は秦州東部の高平を中心に議論される

→傅玄の泰始五年の上奏¹⁸

『晋書』卷四七、傅玄伝

其五曰。臣以爲胡夷獸心、不與華同、鮮卑最甚。本鄧艾苟欲取一時之利、不慮後患、使鮮卑數萬散居人間。此必爲害之勢也。秦州刺史胡烈素有恩信於西方、今烈往、諸胡雖已無惡、必且消弭、然獸心難保、不必其可久安也。若後有動釁、烈計能制之。惟恐胡虜適困於討擊、便能東入安定、西赴武威、外名爲降、可動復動。此二郡非烈所制、則惡胡東西有窟穴浮游之地、故復爲患、無以禁之也。宜更置一郡於高平川、因安定西州都尉募樂徙民、重其復除以充之、以通北道、漸以實邊。詳議此二郡及新置郡、皆使并屬秦州、令烈得專御邊之宜。

¹⁸ なお、山口洋「西晋時代の秦州—武帝期における河西鮮卑対策」(『中央大学アジア史研究』二三、一九九九年)は、この上奏を本伝の編年に従って泰始四(268)年(=秦州設置の前年)と見做し、泰始四年の段階で胡烈が秦州刺史に内定しており、それを前提に議論が行われたもので、政策決定の段階で傅玄の案は調整を加えられたのだと位置づけ、早川花菜「失敗した「漢帝国」—西晋初期(二六五・二八〇年)対外政策の再検討」(『史観』一八三、二〇二〇年)も、山口氏の解釈を支持する。

しかし、この上奏文を卒爾に読めば、これは胡烈が既に秦州刺史に着任している時に提出されたと読むべきであろう。また、この一連の上奏は『晋書』傅玄伝に拠れば、「泰始四年、以爲御史中丞。時頗有水旱之災、玄復上疏曰」から始まる一連のものである。泰始四年の「水旱之災」の内「水」は、『晋書』卷三、武帝紀、泰始四(268)年九月条にある「青徐兗豫四州大水、伊洛溢、合於河、開倉以振之。」を指すと思しい。即ち、秦州やその周辺とは関係ないのである。加えて他の四つの上奏が農務か治水に関係する中、この「其五曰」のみが胡族問題を取り扱っている点も、「水旱之災」に対応しないという点において、他の上奏文との毛色を異にしている。従って、この「其五曰」で始まる上奏は、泰始四年のものとは認め難い。

呂思勉氏は具体的な考証は行っていないものの、「傅玄伝がこの疏(報告者注:該当の上奏を指す)を泰始四年にしているのは、蓋し誤りであろう」(呂思勉『兩晋南北朝史』上海古籍出版社、一九八三年、二一頁、初版一九四八年、拙訳)とし、この上奏文を泰始五(269)年の事とする。上述の理由から、筆者もそれに賛同する。

其の五に曰く。臣、以爲えらく胡夷の獸心にして、華と同じからざること、鮮卑、最も甚だしと。本と鄧艾、苟しくも一時の利を取らんと欲し、後患を慮らず、鮮卑數萬をして人間に散居せしむ。此れ必ず害の勢を爲すなり。秦州刺史の胡烈、素より恩信を西方に有し、今、烈、往くに、諸胡、已に無惡にして、必ず且らく消弭すると雖も、然れども獸心、保ち難く、必ず其れ久安なるべからざるなり。若し後に動爨有らば、烈の計、能く之を制す。惟だ恐らくは胡虜、適に討撃に困して、便ち能く東のかた安定に入り、西のかた武威に赴き、外名は降を爲すも、^{さわ}動くべくして復た^{さわ}動く。此の二郡、烈の制する所に非ざれば、則ち惡胡、東西に窟穴浮游の地を有し、故に復た患を爲し、以て之を禁ずる無きなり。宜しく更に一郡を高平川に置き、安定の西州都尉に因りて樂いて徙る民を募り、其の復除を重ねて以て之を充たし、以て北道を通じて、漸く以て邊を實すべし。此の二郡及び新置の郡を詳議し、皆な、并せて秦州に屬せしめ、烈をして御邊の宜を専らにするを得さしめよと。

→高平は六盤山の東南、安定郡などと接する地域

←この地域には、曹魏の時代に鄧艾によって徙民させられた鮮卑が多数居住していた¹⁹

⇒秦州の鮮卑問題は東部の問題であつて、西部の氐羌問題とは原因から異なる

※氐羌は後漢以来その地に居住⇔高平の鮮卑は曹魏の時代に鄧艾が徙民

¹⁹ 野中敬「鄧艾の鮮卑徙住をめぐって—一統・西晋王朝成立史の一側面—」(『史観』一七九、二〇一八年、四二-四三頁) 参照。

曹魏後半期・西北地域略図



(野中敬「鄧艾の鮮卑徙住をめぐる」五七頁)

◎秦州は胡族対策で設立された州だが、秦州の胡族は大きく言って東部の鮮卑と、西部の氐・羌とに分かれていた。樹機能は活動地域から見れば、西部の氐・羌側に属し、これは前章で確認した樹機能＝羌説とも合致する。

⇒秦州設立の翌年に樹機能が挙兵している事から見れば、胡族対策としての秦州設置は政策としては失敗した事になる。では、当時の西晋の胡族統治はどのような問題を抱えていたのだろうか。

三、胡族と西晋の地方統治

本章では、西晋の地方統治が胡族にとってどのようなものであったのかが考察される。

三-1、地方官と胡族

▶胡族兵動員の事態

→『晋書』卷四八、段灼伝に見える段灼の提出した鄧艾弁護の議論

昔伐蜀、募取涼州兵馬・羌胡健兒、許以重報、五千餘人、隨艾討賊、功皆第一。

昔、蜀を伐つに、募りて涼州の兵馬・羌胡の健兒を取り、許すに重報を以てし、五千餘人、艾に隨いて賊を討ち、功、皆な第一なり。

→曹魏と蜀漢の戦闘において「羌胡健兒」が動員²⁰

→野中敬氏：鄧艾によって徙された高平一帯の鮮卑は徴兵対象であった²¹

→西晋の州郡に管轄される範囲の胡族は、徴発の危機に晒されていた

²⁰ これは金城以西の人々が精確な論功行賞をされなかったという論旨であるため、この「羌胡健兒」は、金城以西に所在していたと思われる。上疏の全文は以下の通り。

昔伐蜀、募取涼州兵馬・羌胡健兒、許以重報、五千餘人、隨艾討賊、功皆第一。而乙亥詔書、州郡將督、不與中外軍同、雖在上功、無應封者。唯金城太守楊欣所領兵、以逼江由之勢、得封者三十人。自金城以西、非在欣部、無一人封者。苟在中軍之例、雖下功必侯。如在州郡、雖功高不封、非所謂近不重施、遠不遺恩之謂也。臣聞魚懸由於甘餌、勇夫死於重報。故荆軻慕燕丹之義、專諸感闔閭之愛、七首振於秦庭、吳刀耀於魚腹、視死如歸、豈不有由也哉。夫功名重賞、士之所競、不平致怨、由來久矣。詩云「尸鳩在桑、其子七兮。淑人君子、其儀一兮。」臣以爲此等宜蒙爵封。

²¹ 前掲野中敬「鄧艾の鮮卑徙住をめぐって一統・西晋王朝成立史の一側面一」参照。

▶地方官の胡族圧迫への危機

『晋書』卷五二、阮种伝

又問戎蠻猾夏。對曰「……自魏氏以來、夷虜内附、鮮有桀悍侵漁之患。由是邊守遂怠、鄣塞不設。而今醜虜内居、與百姓雜處、邊吏擾習、人又忘戰。受方任者、又非其材。或以狙詐、侵侮邊夷。或干賞啗利、妄加討戮。夫以微羈而御悍馬、又乃操以煩策、其不制者、固其理也。……」

又た戎蠻猾夏を問う。對えて曰く「……魏氏より以來、夷虜の内附するもの、桀悍侵漁の患有る鮮し。是れ由り邊守、遂に怠たり、鄣塞、設けられず。而れども今、醜虜、内居し、百姓と雜處し、邊吏、擾習し、人も又た戰を忘る。方任を受くる者も、又た其の材に非ず。或いは以て狙詐し、邊夷を侵侮す。

或いは賞を干め利を啗め、妄りに討戮を加う。夫れ微羈を以て悍馬を御す、又た乃ち操するに煩策を以てす、其の制せざるは、固より其の理なり。……」

と。

→泰始四年頃²²＝樹機能の挙兵以前の状況

²² 『晋書』卷五二、阮种伝

是時西虜内侵、災眚屢見、百姓饑饉、詔三公・卿尹・常伯・牧守各舉賢良方正直言之士。於是太保何曾舉种賢良。

『晋書』卷三、武帝紀、泰始四年十一月条

己未、詔王公卿尹及郡國守相、舉賢良方正直言之士。

なお、渡邊義浩「華夷思想と「徙戎論」」（同『西晋「儒教国家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年、初出二〇〇九年）は、この阮種の主張を受けて「異民族との共存を目指す主張は、西晋の意民族政策の基本方針」（三三二頁）となったとする。しかし、かかる人材選抜の際に提出された意見がすぐさま国家の基本方針になったとするには、なお検討すべき点があろう。また、同論文は中略を挟みつつ『晋書』阮种伝の「策奏、帝親覽焉、又擢爲第一。」までを引き、阮種の対策が「第一」になった事を述べる。しかし、『晋書』阮种伝にある如く、この「第一」は「時种與郤詵及東平王康俱居上第、即除尚書郎。然毀譽之徒、或言對者因緣假託。」云々を受けて再度提出された阮種の対策に対する評価であって、本報告に引いた阮種の対策を含む賢良に推薦された際に彼が提出した対策についてはない。従って、本報告では、阮種の主張が西晋

→秦州では、実際にどうであったか

三-2、初代秦州刺史胡烈への批判

設置の来歴から見ても、秦州統治の鍵は胡族対策にある

⇨初代秦州刺史胡烈は、早くよりその資質に疑問が持たれていた

『晋書』卷三五、陳騫伝²³

騫因入朝、言於帝曰「胡烈・牽弘皆勇而無謀、強於自用、非綏邊之材、將爲國恥。願陛下詳之。」……二人後果失羌戎之和、皆被寇喪沒、征討連歲、僅而得定、帝乃悔之。

騫、入朝するに因りて、帝に言いて曰く「胡烈・牽弘、皆な勇にして謀無く、自用に強ければ、綏邊の材に非ず、將に國恥と爲らんとす。願わくば陛下、之を詳びらかにされんことを」と。……二人、後に果たして羌戎の和を失し、皆な寇せられて喪没し、征討連歲、僅かに定むるを得、帝、乃ち之を悔ゆ。

→胡烈：辺境地域統治の人材としての資質に欠ける

⇨傅玄の上奏「今烈往、諸胡雖已無惡、必且消弭」

→周偉洲氏：胡烈赴任直後は大人しかった胡族が、徐々に胡烈に圧迫され、挙兵するに至った²⁴

の基本方針になったとする見解は取らず、阮種の指摘する彼の意見提出当時の状況に着目するに留める。

²³ なお、同伝はその前に「咸寧初、遷太尉、轉大司馬」とあって、それ以降の説話を咸寧年間の事の如く記すが、これは泰始年間に胡烈も牽弘も戦死している事実と合わない。しかも『晋書』卷三、武帝紀、泰始十年九月条には「以大將軍陳騫爲太尉。」とあって、咸寧に先立つ泰始年間に大將軍から太尉へと遷っている事を知る。恐らく、この記述には錯簡があるのだろう。

²⁴ 前掲周偉洲『南涼与西秦』（一一～一二頁）参照。白翠琴『魏晋南北朝民族史』（四川民族出版社、一九九六年、一〇〇～一〇二頁）も同様の解釈を採る。しかし、何れも樹機能を鮮卑と見做した上での結論である。

※周氏の見解は鮮卑に対するものだが、氐・羌にも当てはまったのではないか

▶「非綏邊之材」牽弘が北地胡に殺害される²⁵

『晋書』卷三、武帝紀、泰始七（271）年四月条

北地胡寇金城、涼州刺史牽弘討之。羣虜内叛、圍弘於青山、弘軍敗、死之。

北地胡、金城を寇し、涼州刺史の牽弘、之を討つ。羣虜、内叛し、弘を青山に圍み、弘の軍、敗れ、之に死す。

→「羣虜内叛」とあるに拠れば、彼の管轄下にある胡族が北地胡に呼応

←彼の人望のなさが推知される

⇒牽弘と同じ資質を指摘される胡烈が、胡族対策が重視される秦州を上手く治めたとは想定し難い

三-3、西晋西北部の胡族問題と樹機能

▶樹機能の勢力範囲は極めて広い

『晋書』卷三八、扶風王駿伝

樹機能・侯彈勃等欲先劫佃兵、駿命平虜護軍文倅督涼秦雍諸軍各進屯以威之。

機能乃遣所領二十部及彈勃面縛軍門、各遣入質子。安定・北地・金城諸胡吉軻・羅侯・金多及北虜熱罔等二十萬口又來降。

樹機能・侯彈勃等、先に佃兵を劫^{おびやか}さんと欲さば、駿、平虜護軍の文倅に命じて涼・秦・雍の諸軍を督して各と屯を進めて以て之を威せしむ。機能、乃ち領する所の二十部及び彈勃を遣わして軍門に面縛し、各と入りて質子を遣

²⁵ 北地は雍州にあるから、涼州刺史が迎撃に出たとは想定し難い。おそらく、北地胡と認識されるグループが涼州方面にまでやってきたのであろう。以下に引用する『晋書』の「羣虜内叛」は、外部から来た北地胡と、涼州の内にいる「虜」との区別を示しているのだろう。

わしむ。安定・北地・金城の諸胡の吉軻・羅侯・金多及び北虜の熱問等二十萬口も又た來降す。

→樹機能につられて西晋と戦った胡族は数多く、また広範囲に展開していた²⁶

⇔彼らが最初から樹機能の名の下に勢力を形成していたかは甚だ疑問

→樹機能が秦州刺史の胡烈を敗死させた事を皮切りに、次々と不満を持つ胡族が挙兵していったというのが真相ではないか

→樹機能が胡烈を破った事を契機として西晋の西北部の胡族が連鎖的に西晋に反したのは、地方官と胡族の潜在的対立が一気に爆発したものと見て良い

←胡烈の戦死は、西晋に不利に働いた事は言うまでもない²⁷

おわりに

本報告で明らかにされたのは、以下の事どもである。

従来、泰始六（270）年六月から咸寧五（279）年十二月の間、西晋を悩ませた西北部の動乱は「秃髮樹機能の乱」と呼ばれてきた。これは「鮮卑秃髮氏の樹機能が、西晋に対して反乱を起こした事件」とされる。しかし、本報告の検討を通して、以上の理解は、正確を欠くものである事が明らかとなった。

そもそも樹機能は同時代的には羌と関係が深いと認識されており、鮮卑の秃髮氏との接続は仮託によるものであった。従って、「秃髮樹機能」という呼称は

²⁶ この点から見れば、傅玄の指摘した「惟恐胡虜適困於討擊、便能東入安定、西赴武威、外名爲降、可動復動。此二郡非烈所制、則惡胡東西有窟穴浮游之地、故復爲患、無以禁之也」は、正確に現実を見据えた見解であった事が裏付けられよう。

²⁷ 樹機能の活躍によって西晋の支配が緩んでいると判断したのは西北地域のみではなく、匈奴の劉猛もまた泰始七年正月に西晋と交戦している。彼は樹機能の戦役に与した訳ではないけれども、西晋に対して初戦優位に立った樹機能に影響され、西晋与し易しと判断した可能性は少なくない。この点については、匈奴の動向を踏まえて検討していく必要があるだろう。後考を期したい。

正確なものではなく、樹機能本人についても鮮卑ではなく羌だと見做す方が妥当である。

また、秦州西部を拠点としたであろう樹機能は、西晋の地方官の胡族への圧迫を受け、それを背景として挙兵したと思われる。そこには西晋の胡族を徴発する体制と、それを利用する地方官の存在があった。初代秦州刺史の胡烈も、地方統治に不向きな人材と認識されており、それが樹機能の挙兵へと繋がっていったと予想される。

樹機能は緒戦で秦州刺史を敗死させたため、予てより動向が不穏であった秦州東部の鮮卑らもこれに呼応し、西晋朝廷を震撼させる一大戦役となった。これは西晋から見れば「乱」であるものの、樹機能らから見れば徴発危機からの脱出に他ならない。

さて、樹機能を羌と見做し、樹機能の挙兵を羌の挙兵と解するならば、今後、如何なる研究の発展が望めるだろうか。最後にその点について触れておこう。

後漢の羌問題が重大だった事は論を俟たないが、樹機能が羌であれば、漢魏・魏晋の二度の革命を経ても、なおこの問題が受け継がれ続けた事を意味する。従って、もう少し広い時間軸で見れば、中国西北地域の羌問題は、漢代以来なお燻り続けており、樹機能を通して何度目かの噴火が起きたと見做す事ができるだろう²⁸。これは、樹機能の挙兵を、前は漢代の羌問題と、後は斉万年の乱等とも

²⁸ 魏晋以前の西北部や羌については、王明珂（本間寛之 訳）「中国漢代の羌（一）—生態学的边境と民族的境界—」（『早稲田大学長江流域文化研究所年報』三、二〇〇五年）、同「中国漢代の羌（二）—生態学的边境と民族的境界—」（『早稲田大学長江流域文化研究所年報』四、二〇〇六年）、同「中国漢代の羌（三）—生態学的边境と民族的境界—」（『早稲田大学長江流域文化研究所年報』五、二〇〇七年）、王明珂（柿沼陽平 訳）「中国漢代の羌（四）—生態学的边境と民族的境界—」（『史滴』三三、二〇一一年）、同「中国漢代の羌（五）—生態学的边境と民族的境界—」（『史滴』三四、二〇一二年。以上の原著は、王明珂氏の博士論文 *The Ch'iang of Ancient China through the Han Dynasty: Ecological Frontiers and Ethnic Boundaries*（一九九二

関わる形で理解する必要性を察せしめる。しかし、この問題を検討するにはもはや紙幅が尽きた。かかる観点からの後漢以降の西北問題の再分析は、今後の課題としたい。

【附記】本稿は令和三年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費 JP20J01878）による研究成果の一部である。

年、ハーバード大学提出)である)、關尾史郎「漢魏交代期の河西」(同『三国志拾遺 正一史料・地域・対外関係』Nakazato Labo、二〇二一年、初出二〇〇三年)、森本淳「後漢末の涼州の動向」(同『三国軍制と長沙呉簡』汲古書院、二〇一二年、初出二〇〇八年)等を参照。